ゴチツクの末流と考へられる十五世紀フランボワイヤン樣式傳統の發展とする說等、何れも論理的確實性に於いて積極性を缺く事を說き、ロココ樣式こそは寧ろ支那佛蘭西式とも稱すべきであつて、そこには東方文明の影響の大なるものがあるべき事を論じられて居る。（菊判五九四頁、挿圖一四五個、昭和十二年十二月、弘文堂書房發行、正價七圓）（岡田芳三郎）

新增東國輿地勝覽索引

末松保和編

ウンヌンの件はコレ〳〵の本には見えてをらん、といふことを言はなければならたいためにだけでも、何十卷何百卷の本に血眼になつて食ひついてかゝらねばならん苦い經驗は、凡そ史學、特に涯しもない樣な老大蕪雜な資料を抱へこんだ東洋史學の研究に携はるものゝ何時も嘗めさせられるところだらう。索引といふ便利なものが無いことのためにだけだ。勿論その血眼になることによつて思ひがけない眼福も時に得られないのではないし、さういふことが永い一生學問の道には何よりも爲になるのだと私共は常々大先生方に訓へられてゐる。然し大先生方の訓へ給ふこゝろは決して索引なるものが不要だといふことではない。索引は不可缺に必要だ、必要だが、一度は必ず血眼になつて索引の必要を痛感するまでになれとのたまふのだ。當然のことだが、血眼になつたことのある本であればある程、愈ゝ索引戀しさの念の切であることを誰しもがきつと味はされてゐることだらうと思ふ。然るにこの索引編纂事業なるものが常に思ひがけない勞力と時日、從つて經費とを要する關係から、我が學界の如きにあつても兎もすれば繼子的な取り扱ひを受け勝ちで、折角これが編纂に從事するものも、あれやこれや、その苦しみの實際想像以上のものであるらしいのは殘念と申す他ない。北京の燕京大學が莫大な經費と人員とを擁して引得編纂の專門所を起し、其の成果を續々として世に問うてゐる事實は周知のことだ。强大な米國資本を背後にしてをれば何でもないことだと云つてしまへばそれ迄だが、兎も角これだけの大編纂所を計畫設立し、着々としてその大成績を擧げつゝあることは讃稱に値しよう。もとより數ある引得のことゝて、杜撰粗漏の噂あるものもないではないが、然し私の研究領分から云つても、「明代八十七種傳記引得」「淸代三十三種傳記引得」等の如き、今は手許から遠ざけ得ないこと猶ほ女房の如くですらある。私などは、明淸時代の人で、これ等の引得に見當らないものは一應搜索を打ち切ることにしてゐる。

新增東國輿地勝覽索引の編者末松城大助敎授は勝覽に血眼になること多年、勝覽に精通すること比類なき人だ。勝覽が朝鮮史研究者に必須不可缺の書であることは言ふ迄もない。氏は日夕勝覽を座邊にして飜くにつれ、勝覽索引編纂の必要であることを屢加的に感じた。氏の座邊には郡名門索引、人物門索引等が次第に册を成し、終に積むところを整理案排して本索引一卷を纏め上げられるに到つた。全體を一般部、人名部、姓氏部、土產部の四部門に分ち、各部門中の名辭を字音引きに排列した（畫引索引をも添

へて）本索引の體例が如何に優れたものであり、如何に便利なものであるのか、勝覽に就いて知る處僅少でしかない私の詳しく紹介し得る限りではないが、一見して感じ得る本索引の整然たる組成が決して單なる思ひつきなどによつて出來たものでないことは、「新增東國輿地勝覽索引の作製といふことは、或る意味では勝覽の分解作業である。その分解作業に着手する以上は、先づ徹底的に分解を遂行しなければならぬ。そしてそれと同時に、それを單なる分解に終らしめず、分解に基づく再建の作業にまで到達せしむ可きである。これは私が索引カード整理中に深く植ゑつけられた心得であつた」と述べられた氏の明徹な索引編纂觀に明らかに看取り得るであらう。かゝれば氏が更に「新增東國輿地勝覽の索引といつても、その編者によつていろ〳〵の形のものが作られるであらう。こゝに公刊する索引は、その可能なる幾種かの形の中の一つに過ぎないのみならず、この形をとるにしても、これのみで滿足すべきものとは思はれない。故に私は本書を索引の正編とし、なほ他日續編の編輯を企圖して居るわけである」と言はれた壯んな意圖も力强い抱負も、本書を十二分に意義付けるものとして聞き得るであらう。而してかゝる所言の下、既にその可能なる幾種かの形の一つである末松氏型索引の見事に浮琢されてゐることを見ると同時に、かゝる心得乃至意圖が常に如何なる索引編纂者にも最も望ましいものゝ一つであることを言つておき度い。ともすれば平板と無味とに墮り易い索引篇纂事業は必ずや如斯き心得及び意圖の下に脈々たる膽吹きと意義とを味得することであらう。

氏の本索引を編む、全く多忙な本務の餘暇を以てせられたものだといふ。讃嘆の念を禁じ得ないと同時に、こゝにも亦索引編纂者の考ふ可く學ぶ可き態度の存することを伺はねばなるまい。

尙最後に、私一個の大きな喜びを卒言さして頂き度い。それは本索引の據本として、朝鮮史學會刊行の勝覽が使用されたといふことだ。同本の校閲は私亡父の携はつたところなのである。同本を所持せられる方は本索引を、又本索引を入手せられた方は必ず同本を具へられなければ役立たない。（蒲列、本文六〇〇頁、解說——新增東國輿地勝覽とその索引——三〇頁、昭和十二年三月朝鮮總督府中樞院發行、定價未詳）〔今西春秋〕

西甘肅の蒙古方言研究　第三　蒙佛辭書

Le dialecte monguor parlé par les mongols du Kansou occidental. IIIe partie, Dictionnaire monguor-français par A. de Smedt, C. I. C. M. et A. Mostaert, C. I. C. M. Pei-p'ing, 1933, pp. XIV＋521.

甘肅西部の西寧の東北ナリンゴルのアリマ・ハンシャルに話さるゝ蒙古方言は、スメト及びモステルト兩師の研究題目となり、其の音韻論はアントロポス誌上に、其文法論はアジア・マヨル誌上に夙に發表され、又其概論は北京輔仁大學雜誌に出でたが、引續いて本辭書を世に貽り、更に昨年かには歌謠集を出し、其紹介